

夫婦間サポートのパターンと発達的变化

稲葉昭英

(東京都立大学人文学部)

Patterns and Developmental Changes of Marital Support of Female and Male in Japan
Akihide Inaba

Many articles exist that refer to the gender differences of the meaning of social support in marital relationship. According to them, it appears that men depend on marital support more than women, and it is said marriage is more beneficial for men than women. This article explores patterns of marital support with using the Japanese national survey on families (NFR98). The exploratory analysis shows the following findings: 1) Men receive more marital support than women consistently throughout the life span. 2) The support from spouses denotes a U-figure shaped curve along with the development of the family life stage for both men and women. 3) These developmental changes were observed not only in couples with children but also couples without children. Discussions are made about the possible explanations for these patterns.

キーワード; ソーシャル・サポート、夫婦関係、性差、結婚

keywords: social support, marital relationship, gender, marriage

1. 研究の目的

夫婦関係が夫、妻にとっても異なる意味を明かにしようとする研究が近年頻出している。そうした研究は、夫にとっての家族や夫婦関係と妻にとっての家族や夫婦関係が異なるものとして経験されており、これまでの家族研究が基本的には前者の視点しかもたなかったことを批判する。こうしたアプローチのひとつであるストレス研究は、個人の経験するストレス(ディストレス)という変数を通じて、性別によって社会の経験の仕方が異なること、その特殊ケースとして家族や夫婦関係の経験も性別によって異なることを指摘し続けてきた。その主要な知見を略述すれば以下のようなものとなる。

女性は他者にケアをする役割を内面化していることが多く、他者の身に生じた出来事や他者の状態への共感を男性よりも多く経験する¹。こうして女性は男性よりも広い範囲の出来事から影響を受ける(Kessler and McLeod, 1984; Kessler, McLeod and Wethington, 1985; 稲葉、1998; 1999)。この一般的なパターンは家族内でも成立する。妻は夫の状態から大きな影響を受けるが、夫が妻の状態から受ける影響は相対的に小さい。夫の職業上の問題やストレスは妻の心理状態に影響を与えるが、夫は妻の職業上の問題やストレスから妻ほどは影響を受けない (Bolger et al., 1989; 1990)。夫婦関係の親密性が高まるほど、夫の状

¹ ここではケアは「他者の無限定的な欲求を充足する行為」と定義し、その特殊ケースとして介護、家事、育児、世話、気遣いなどの経験的な事象を指定する。

態や職業上の問題が妻に及ぼす影響は大きなものとなる(Rook et al,1994;稲葉、2001)。

一方で妻は夫よりもソーシャル・サポート²などの対人関係に恵まれているとされる(Cutrona,1995;稲葉、1998)。男性は他者に自己開示したり感情表出することが一般的に抑制され、否定的に評価される(Weiss,1989;Pearlin and McCall,1989)。一般に個人の形成するパーソナルネットワークは同性中心に組織化されるために、男性のネットワークは男性で占められる傾向が大きくなる。こうして男性は親密な関係を作ることが難しく、彼が自己開示や感情表出を行える空間は家族や配偶者といった領域に限定されることになり、こうした関係に大きく依存することになる(Cutrona,1995;稲葉、1998)。こうして、男性は仕事や家族外で生じた問題を家族に大きく持ち込む(Bolger et al.,1989)。この結果、妻が夫の職場の問題から受ける影響はより大きなものとなる。一方、女性は対人関係において自己開示や感情表出することが男性ほどは否定的に評価されないという。女性の友人は女性であり、女性は男性ほどは家族や配偶者にサポートを依存しない(Cutrona,1995)。こうして女性は男性に比して仕事上の問題を家庭に持ち込まないという(Bolger et al.,1989)。

こうして、配偶者の有無それ自体が男性の心理状態に大きな影響を与えるが、女性にはそれほどはこの影響は観察されない。しかし、このことは女性が家族や夫婦関係から影響を受けないことを意味するものではない。むしろ、家族の状態——配偶者の有無のような属性的な指標ではなく、関係の質——からより大きな影響を受けるのは女性であるとされている(Cutrona,1995)。これは、女性が基本的に家族生活の中で多くの役割を有し、家族生活に主観的にコミットしているからだとされている。

個人の保有するサポート源という観点からは、男性にとって夫婦や家族関係は希少なサポート資源であり、女性にとってはサポート資源の選択肢のひとつであるということになる。ここから、結婚とは男性にとってきわめて有利なシステムであるという結論が引き出される。

以上のいくつかの仮説は日本でもすでに検証されている。稲葉(1998a)は千葉市から得た無作為標本をもとに、ソーシャルサポートの社会的パターンを検討した。そこでは性別に強い主効果が示されたが、同時に結婚によって男性のサポート量が急激に増加すること、逆に女性は出産を経てサポートの量が減少することが示された。しかし、この研究は配偶者も含めた社会関係一般から得られるソーシャル・サポートを扱っており、配偶者からのサポートそれ自体が扱われているわけではない。

以下では以上の背後仮説をもとに、配偶者から得られるサポートのパターンとその発達の变化についての探索的な研究を行う。基本的には性別によるその差異と、ライフステージや結婚年数の経過に伴うその変化を中心としてパターンの把握を行いたい。

2 使用するデータと分析方法

2.1 データ

NFR データのうち、有配偶者でかつ配偶者と同居しているもの 5634 名(男性 2775 名、女性 2859 名)を対象とした。これを全サンプルと呼んでおく。以下、必要に応じてさまざま

² ここではソーシャル・サポートを対人関係から得られる手段的・表出的支援であると暫定的に定義する。詳細は稲葉(1998 b)などを参照。

まなその下位サンプルを抽出して対象とする。

2.2 被説明変数

主要な被説明変数は配偶者からの情緒的サポートについて問うている問 16 付問 16(ア)(イ)(ウ)の 3 項目である。教示は『つぎにあげる (ア) ~ (ウ)のそれぞれの項目は、あなた方ご夫婦にどの程度あてはまりますか』、各項目は (ア)「配偶者 (夫・妻) は、私の心配事や悩み事を聞いてくれる」(イ)「配偶者 (夫・妻) は、私の能力や努力を高く評価してくれる」(ウ)「配偶者 (夫・妻) は、私に助言やアドバイスをしてくれる」、というもので、回答は「あてはまる(=1)」「どちらかといえばあてはまる(=2)」「どちらかといえばあてはまらない(=3)」「あてはまらない(=4)」の 4 件法で査定されている。なお、分析にあたっては各項目得点を逆転し、得点が高いほどサポートが高いものとした。

まず、これら 3 項目とその合計得点の要約統計量を表 2.2.1 に、項目間の内部相関を表 2.2.2 に示す。

Tab 2.2.1 Basic statistics of the item variables composing dependent variables

Item	Married men					Married women				
	N	mean	SD	skew*	kurt**	N	mean	SD	skew	kurt
(ア)	2759	3.26	0.82	-1.05	0.67	2841	3.13	0.91	-0.86	-0.07
(イ)	2745	3.12	0.81	-0.76	0.20	2829	2.86	0.89	-0.46	-0.49
(ウ)	2756	3.14	0.82	-0.81	0.22	2838	3.04	0.91	-0.74	-0.24
Sum	2745	9.52	2.17	-0.88	0.65	2828	9.02	2.43	-0.73	-0.03

*skew: skewness **kurt; kurtosis

Tab 2.2.2 Correlation within item variables and Cronbach's alpha coefficient

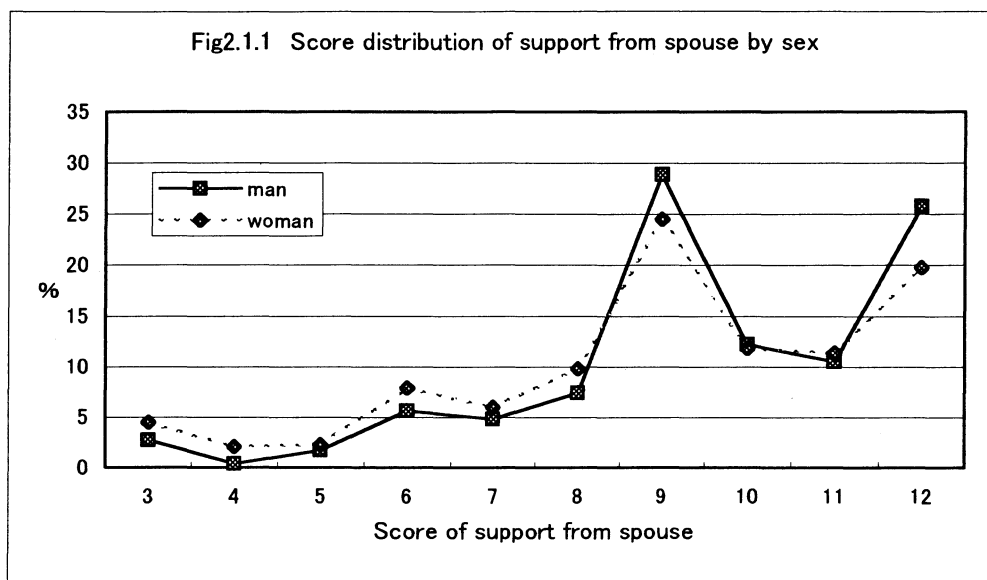
item	men		women	
	(7)	(1)	(7)	(1)
(イ)	65***		66***	
(ウ)	71***	67***	77***	67***
α of summed score	.86		.88	

*** $p < .001$

表 2.2.1 から次のようなことが読み取れる。①男女とも、概して配偶者からのサポートは高い。②3 項目すべてにおいて男性のほうがサポート得点が高い。③男女ともに、(イ)の自尊的サポートを問う項目の平均点が最も低く、(ア)の情緒的サポートの得点が高くなる。とくに自尊的サポートは女性に得点が低く、夫に比して妻のほうが、配偶者からの自尊的サポートを得る機会に恵まれていないといえる。

表 2.2.2 から、男女とも 3 項目の内部相関が極めて高いことがわかる。このため、3 項目の合計得点を指標とすることが考えられる。この合計得点の α 係数はいずれも高く (表 2.2.2)、少なくとも項目の内的整合性は高いといえる。そこで、以下ではこの合計点をもって配偶者からのサポートを測定する変数とする。

男女別に見た配偶者からのサポートの得点分布を図 2.1.1 に示す。ここからわかるように、分布は左に歪む傾向があり、とくに最大値の 12 点の分布が最頻値の 9 点について高いため、分布の形状が正規分布からずれたものとなる。ただし、男女ともに歪度・尖度はそれほど大きくはなく（表 2.1.1）、量的変数としての分析には十分耐えられる分布と考えて良い。



ついで、この配偶者からのサポートの妥当性について若干検討する。内容的妥当性に関しては、この 3 項目は順に情緒的サポート、自尊的サポート、情動的サポートを測定しており、あまり実体的なサポートを測定していない。この意味では、基本的にソーシャルサポートの全側面を測定している尺度というよりは、手段的サポート・情緒的サポートとして大別されるソーシャル・サポートのうち、後者を中心に測定していると考えべきだろう。

並存的妥当性の指標としては、問 30 (ア) の「問題を抱えて落ち込んだり、混乱したとき」に配偶者を頼りにするかどうか (1,0 のダミー変数)、問 16 付問 18 (オ) の「結婚生活全体について」の満足度 (得点が高いほど不満度が高い)、との関連が検討可能である。相関係数は前者について男性で $r=.25, p<.001$ 、女性で $r=.41, p<.001$ 、後者について男性で $r=-.49, p<.001$ 、女性で $r=-.57, p<.001$ といずれも有意に高い相関が示された。とくに女性においては情緒的サポートと援助源としての配偶者の選択、結婚満足度が大きく関連しているが、男性は援助源としての選択との相関がそれほど高くないことは興味深い。

このように、配偶者からのサポートの測定項目としては一定の妥当性が存在することが推察できるため、以下ではこの変数をもとに主要な分析を行う。

2.3 分析方法

以下では基本的に配偶者からのサポートがさまざまな属性変数によってどのように規定されるのか一平たく言えば、誰が配偶者からの情緒的サポートに恵まれており、誰が恵まれていないのか一を検討する。しかしながら、NFR データのように 20 代から 70 代までの広範囲の年齢層が対象である場合には、属性変数の意味が対象者の年齢によって大きく異

なってくるために、この点を考慮した分析が必要である。20代で無職と70代で無職の意味は異なるし、同様に男性にとっての無職と女性にとっての無職の意味も異なったものとなる。

このため、最初に全サンプルを用いて性差と発達的变化について検討する。発達的变化とは一定の時間従属的な変化であるが、ここでは年齢、ライフステージ、結婚年数の3変数を主要な変数と考える。家族研究にとっては後2者が重要であるが、注意すべきはライフステージにおける「子どものいない」対象者の扱いである。この対象者は、結婚年数が浅く、まだ子どもが生まれていない場合と、かなりの結婚年数が経過しているが子どもが死亡していたり、意図的・非意図的理由によって子どもがいない場合とがあり、これまた様相を大きく異にする。したがって、「子どもなし」の対象者の扱いは慎重に検討することにした。

この中で全体の傾向を把握した後に、最終的には一定の属性的変数を統制要因として取り込んで、発達的变化の規定性が示されるかどうかを検討してみたい。

3 配偶者からのサポートの発達的变化

3.1 発達的变化の設定

ここでの分析の中心は発達的变化を捉えることである。まず、対象者の年齢は男性の平均52.8、標準偏差13.0、女性は平均50.8、標準偏差12.7で、28-34、35-39、40-44、45-49、50-54、55-59、60-64、65-69、70-78の9カテゴリーに区分した。結婚年数については結婚年齢よりも結婚年のほうが欠損値が少なかったために、調査年である1999年と結婚年の差から求め、この数値が欠損値の場合に限り結婚年齢から結婚年を算出して同様の手続きで結婚年数を求めた。この結果、男性は平均26.0、標準偏差13.7、女性は平均27.0、標準偏差13.7という結果が得られた。結婚年齢とサポートの間に線形関係が示される根拠はないので、男女とも年数を0-5、6-10、11-15、16-20、21-25、26-30、31-35、36-40、41-45、46以上の10カテゴリーに区分した。

ライフステージの指標は存命中の末子の年齢で設定する。これについては、子どもなし、0-6歳、7-12歳、13-18歳、19-24歳、25-30歳、31-39歳、40歳以上の8カテゴリーを設定した。年齢は34歳以下、35-39歳、40-44歳、45-49歳、50-54歳、55-59歳、60-64歳、65-69歳、70歳以上の9カテゴリーを設定した。³

いずれの変数においても性別とクロスさせたときの最小セル度数は100を超えており、分析には十分なサンプル数が確保されている。

3.2 発達的变化についての分析と結果

発達的变化を検討する場合に、対象者の性別は無視できない。このため、性別と各発達変数を独立変数とした2要因配置の一般線形モデルを行った。この結果を表3.2.1に示す。

表3.2.1から、①性別にきわめて強い規定力があり、②どの発達変数も有意な影響力を持ち、③性別と発達変数との交互作用効果が示されないこと、が理解できる。3つの発達変

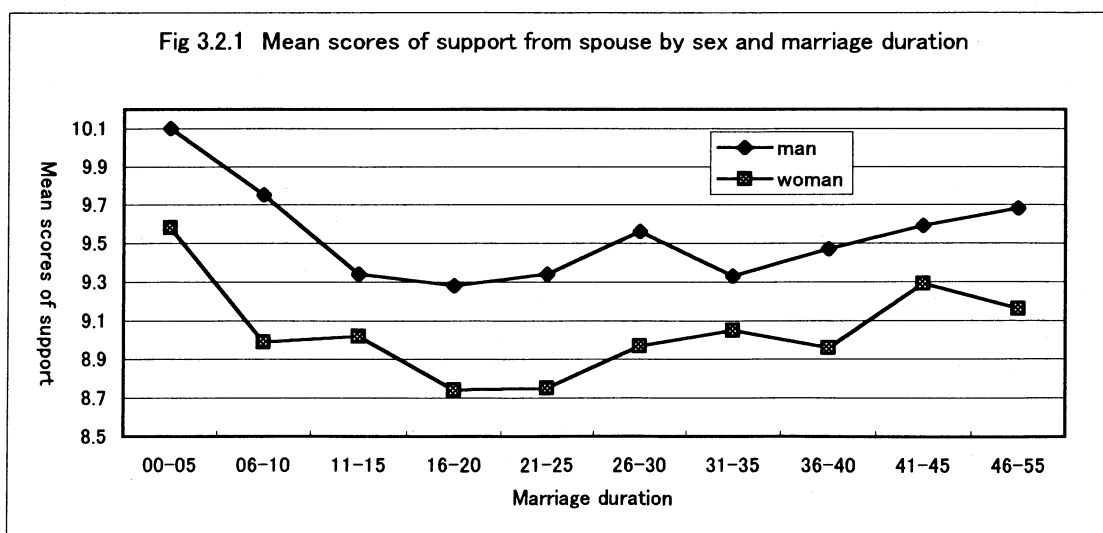
³ 回答者年齢のほかに妻年齢（男性回答者のみ、妻の年齢にする）で同様なカテゴリー設定をおこなって分析を試みたが、結果は回答者年齢の結果と大きく異なるものではなかった。

数を F 値の大きさだけから比較すれば、年齢の効果がもっとも小さく、ライフステージによる効果をもっとも大きいことになるが、ライフステージと結婚年数の効果はほぼ同程度で識別することは難しい。ちなみに、これらの検討を 2 元配置の一般線形モデルによって行なうと、ライフステージと年齢を同時に導入した場合には年齢の効果は消失するが ($F_{(8,5545)}=1.44, p=n.s.$)、ライフステージと結婚年齢は同時に投入しても双方ともに効果は維持される。基本的にはライフステージと結婚年齢による変異が認められるといえる。

Tab 3.2.1 General linear model on support with sex and developmental variables

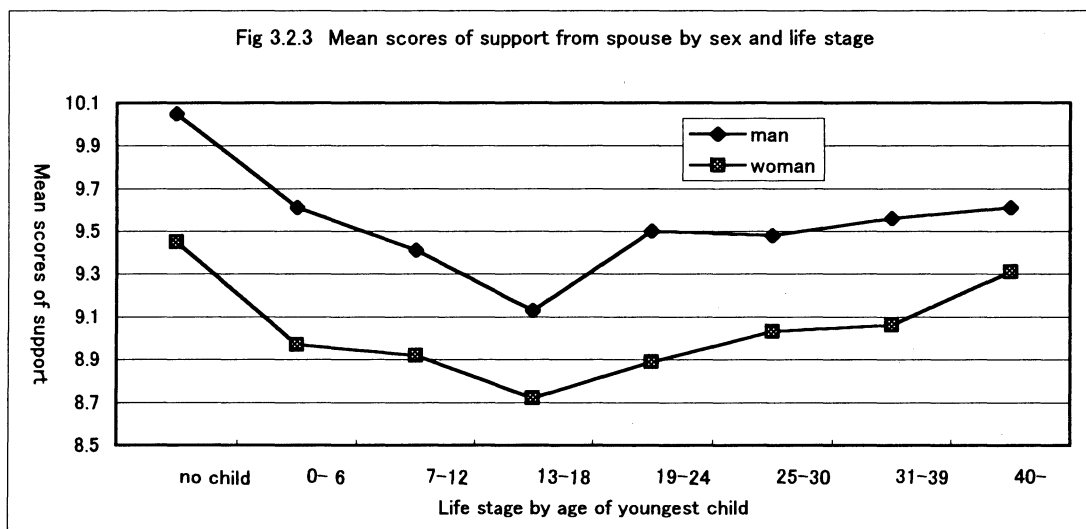
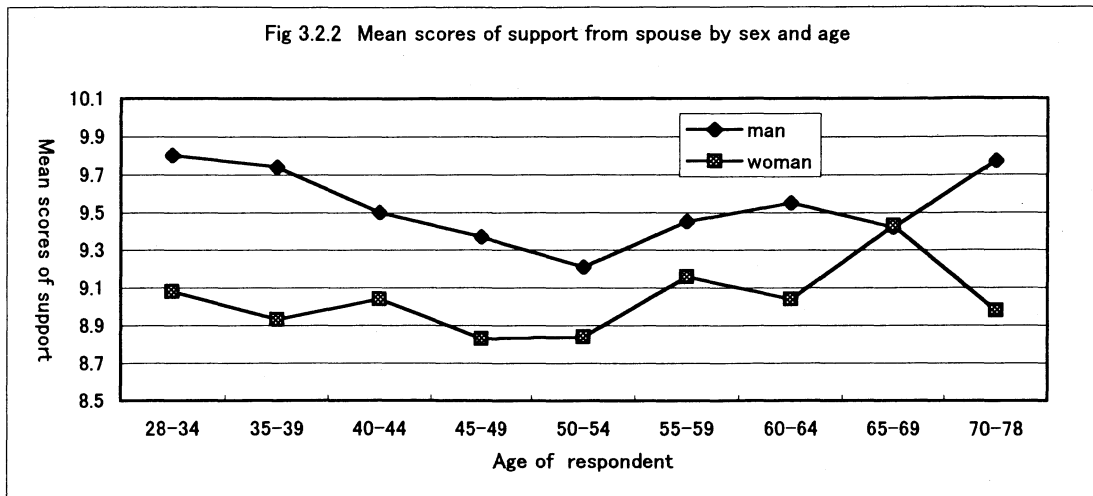
Independent variables		F	p
Sex	(A)	64.23	<.001
Marriage duration	(B)	4.67	<.001
A × B		0.6	n.s.
Sex	(A)	63.93	<.001
Age	(B)	2.36	<.05
A × B		1.85	n.s.
Sex	(A)	66.43	<.001
Life stage	(B)	5.73	<.001
A × B		0.4	n.s.

それぞれの分析に対応する群別平均値を以下図 3.2.1、3.2.2、3.2.3 に示す。



3つの図から、男女ともに配偶者からのサポートは基本的には高いのだけれども、①ほぼ一貫して男性に高く、これと比較して女性に低い傾向があり、②いずれも初期段階でサポート得点が高く、中期段階で低下し、後期段階で上昇するというU字型の分布を示すことが理解できる。ただし、回答者年齢で見た場合には、特に女性においてややこうした傾向

と異なるパターンが看取される。



3.3 考察

より詳細に考察を加えよう。基本的には結婚年数 5 年以内、または子どものいない段階で男女ともに配偶者からのサポートをもっとも多く経験する。回答者年齢で見た場合（とくに女性）にはこの時期がさまざまな年齢の中に解消されてしまうために、こうした傾向が示されにくいようだ。結婚年数 6 年以降、末子年齢 0-6 歳時点で急激に配偶者からのサポートは低下する。この後に緩やかにサポートの得点は低下し、男女ともに結婚年数 16-20 年ころ、末子年齢 13-18 歳ころ、回答者年齢では 50-54 歳ころが底となる。この後は緩やかにサポート得点は上昇していくが、回答者年齢と結婚年数からは、女性が 70 歳以上になった時点で再び小さな下降があることが示されている。

以上の結果は基本的には親への移行(transition to parenthood)や結婚満足度の U 字型曲線などに関する先行研究とほぼ一致する。乳幼児の出現とともに夫婦間に問題が生じやすくなること、子どもが反抗期のころに子どもとの関係を媒介として夫婦関係がもっとも悪

化することはアメリカにおいて再三指摘されている (Rossi,1972;Glenn,1989;White and Booth,1985;稲葉、1992)。ストレス経験の生涯発達的な変化についても逆 U 字型パターンが示されることがわが国の国民生活基礎調査の 2 次分析から報告されているが (稲葉、1999)、この場合のストレス経験率のピークは男女とも 35-44 歳であるため、本研究の結果とはややずれているように思われる。

ただし、アメリカの結婚満足度に関する研究では、こうしたパターンが結婚年数の効果なのか子どものライフステージの効果なのかについて議論がわかれている。基本的には①子どもがいない場合でも、結婚年数の経過にしたがって結婚満足度は低下する、②しかし子どもがいない場合には離婚が選択されることも多いため、子どもがいない条件で結婚満足度の低いカップルは有配偶者のサンプルから消えてしまう傾向がある、③子どもがいる場合には結婚満足度の低下にもかかわらず離婚が控えられる傾向があるために、結果として満足度の低いカップルが多く観察される傾向がある、という (White et al.,1987;Glenn,1990;稲葉、1992)。

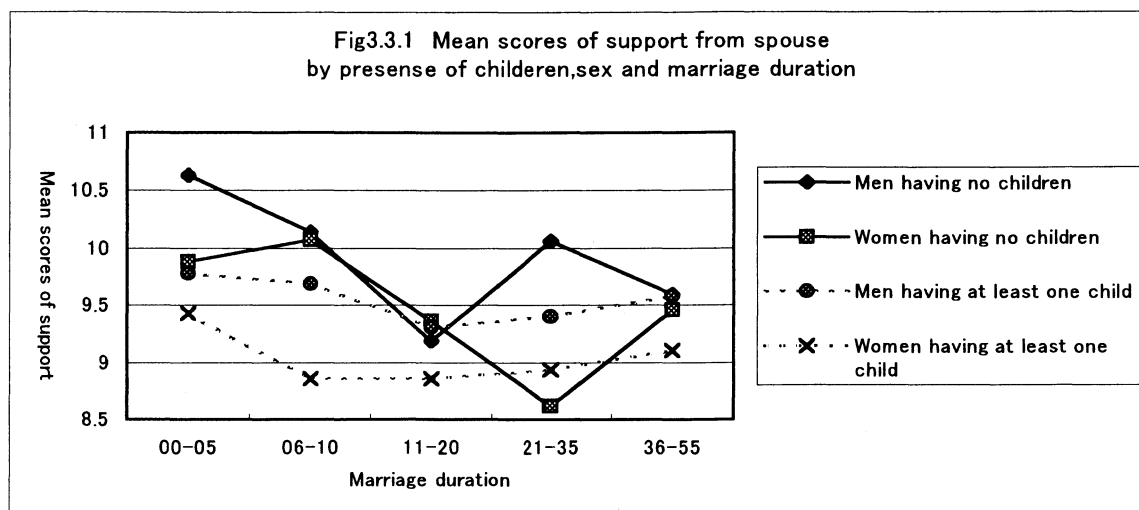
3.3 結婚年数の効果か、子どものライフステージの効果か

この問題を解明するのは簡単ではない。結婚年数と子どものステージには大きな関連があるためである。ここではまず、対象者を子どものいる群といない群に区分し、結婚年数の経過によるパターンの差異を検討しよう。子どもの有無、性別、結婚年数の 3 つが独立変数となるが、3 要因の交互作用を測定するには水準の繰り返し数を確保する上で問題が生じる。そこで、サンプルを子どもなし群、子どもあり群に分割し、それぞれの中で性別と結婚年数を独立変数とした 2 要因配置の一般線形モデルを行う。なお、子どもなし群はサンプル数が小さく、結婚年数をこれまでと同様のカテゴリーで分析することは難しい。したがって結婚年数は 5 年以下、6-10 年、11-20 年、21-35 年、26-55 年の 5 カテゴリーで区分した。最小セル度数は子どもなし・女性・結婚 6-10 年の 28 人で、分析はやや不安定になる傾向は否めない。

一般線形モデルの結果を表 3.3.1 に示す。いずれも性別と結婚期間の主効果は有意であるが、交互作用は見られない。この結果はほぼこれまでと同様である。ただし、性別の効果は子どもなし群において弱まる。

Tab 3.3.1 General linear model on support with marriage duration for having no children and at least one child separately

Independent variable		Having no children		Having at least one child	
		F	p	F	p
Sex	(A)	5.21	<.05	57.1	<.001
Marriage duration	(B)	4.11	<.01	3.71	<.01
A × B		1.66	n.s.	0.72	n.s.
n		405		5151	



子どもの有無別・性別・結婚期間別のサポートの平均値を図 3.3.1 に示す。図 3.3.1 から次のようなことが理解できる。①基本的には子どもなし群の男性においても結婚 5 年以内の期間で配偶者からのサポートが高く、その後低下が見られる。この傾向は子どもあり群ともほぼ共通している。②しかし、子どもなし群の女性は結婚 6-10 年目にサポートのピークがあり、その後低下がはじまって、結婚 21-35 年時点が底になる。この時点での得点は、すべての組み合わせの中でもっとも低い。少なくとも子どもがいないと離婚が選択されやすく、この結果として夫婦関係が良好なカップルが検出されやすい (White et al.,1987) と考えることは難しいように思われる。ただし、この時期の男性はサポートがかなり高い。③結婚 5 年以内、21-35 年時点を除けば、子どもなしの男性・女性、子どものいる男性の得点の傾向は比較的類似する。④結婚 21-35 年時点を除けば、総じて子どもなし群は男女ともに子どもあり群の女性よりもサポート得点が高い傾向がある。

このように、基本的には子どもなし群でも一定期間後にサポートは低下していく傾向が見られる。これは、White and Booth(1985)が指摘した、親への移行を伴わなくとも「結婚期間の経過による結婚満足度の低下」が生じるという知見と対応する。しかも、子どもなし群においても結婚 11-20 年時点でサポートが低下することは、必ずしもこの現象が反抗期の子どもの存在によってのみ説明できるものではないことを示唆している。このように考えると、配偶者からのサポートの変化を家族内部のライフステージの変化によってのみ説明することは問題があるといえそうである。職業生活上の変化や、夫婦関係それ自体の心理・社会的移行という視点を同時に考慮する必要があるようだ。

また、子どもなし群の結婚 5 年以内は、出産によって子どもあり群に移行する。少なくとも、この時点で子どもを生涯産まないことを選択しているカップルは少ないように思われる。意図的にせよ、非意図的にせよ、子どもを産まないことが確定するのは結婚年数 6-10 年の段階の後半以降のことであると思われる。ライフステージの移行をクロスセクショナルに分析する場合には、子どものいないものを一括するのではなく、結婚期間 10 年以内とそれ以降を区分し、前者と子どものいるものとをあわせてデータとするほうが望ましいように思われる。

結婚年数 21-35 年を除く 3 時点では夫婦間のサポートの差はほとんど見られず、この 3

時点では情緒的サポートの交換がほぼ対等であると考えられる。しかし、21-35年時点の差異の大きさは無視できないほど大きく、この時期子どもがいない夫婦に何が起きているのかを明かにする必要があるだろう。

3.4 属性的要因の統制と結婚年数・ライフステージの効果

以上の分析では性別以外の変数はコントロールされていない。これは対象としているデータの年齢層が極めて広いため、まず発達的変数の効果を記述的にとらえることを目的としているためである。最後に、一定の属性的な変数を投入した上でもこれらの変数の効果が示されるのかどうかを検討しよう。

統制変数とする属性は以下のような変数である。①性別（男、女）、②夫の職業（専門・管理、販売・事務・サービス、技能・農林、無職）、③妻の就業形態（経営・役員・常雇、臨時雇、自営他、無職）④夫の学歴（中高卒、短大卒以上）⑤妻の学歴（中高卒、短大卒以上）、⑥年収（0-199万、200-399万、400-599万、600-799万、800-999万、1000-1199万、1200万以上）。ライフステージについてはこの6変数を統制変数とした多元配置の一般線形モデル（model1）、結婚年数についてはこの6変数と子どもの有無（あり、なし）の計7変数を統制変数とした多元配置の一般線形モデル(model2)を行なう。配偶者からのサポートを被説明変数としたこれらの一般線形モデルの結果を表3.4に示す。

Table 3.4 General linear model on support controlling for demographic variables

Independent variables	F		
	df	Model 1	Model 2
Sex	1	56.76***	58.23***
Husband's job	3	3.71*	3.98**
Wife's employment status	3	2.03	2.37
Husband's education	1	6.21*	7.39**
Wife's education	1	10.10**	11.82***
Household income	6	1.05	1.00
Having children	1	9.65**	—
Marriage duration	9	4.21***	—
Life stage	7	—	6.95***
n		5634	5634

* p<.05 **p<.01 *** p<.001

表3.4から、属性的な変数を統制しても結婚年数・ライフステージに有意な効果が示された。この意味で、夫婦間のサポートのありようが結婚年数やライフステージによって一定の差異を示すことはほぼ間違いないと結論付けることができる。ただし、表4.3で有意な効果を示した属性変数の解釈は困難である。30代の無職と60代の無職ではまったく意味が異なるように、これらの属性変数自体がライフステージや年齢によって異なった意味を持ち、こうした交互作用自体が分析には取り込まれていないからである。あくまでも表3.4は結婚年数とライフステージの効果を確認するために行なわれたものであり、属性変数の効果を検討するために行われたものではないことに注意が必要である。

4. 結論

以上から示される結論は以下のようなものである。

- ①総じて男性のほうが夫婦関係から多くの情緒的サポートを得ており、女性のほうが夫婦関係から得る情緒的サポートの量は少ない。
- ②しかし、この差異は子どものいない夫婦においては小さくなる傾向がある。
- ③情緒的サポートの量は、結婚直後の時期に男女とも最も高く、その後次第に低下し、高齢期に再び上昇する U 字型のパターンをとる。
- ④この U 字型パターンは子どもをもった夫婦に典型的に生じるが、子どもをもたない夫婦においても類似した傾向が見られる。
- ⑤このため、U 字型パターンが子どもとの関係によってのみ生じていると考えることはできない。結婚年数の経過による、夫婦関係それ自体の変化によって U 字型のパターンが生じている可能性がある。
- ⑥女性に関して言えば、概して子どもをもった女性のほうが、もたない女性よりも夫婦関係から得るサポートは低い。この差自体は子どもとの関係から説明することができるかもしれない。

少なくとも①から、男性のほうが女性よりも夫婦関係から多くのメリットを享受しており、夫婦関係に依存する部分が多いことが推察される。しかし、この傾向は②に見られるように子どもがいない場合に小さく、いる場合に大きい。こうした差異が生じる原因として考えられるのは、出産以降、家族内のケア役割に女性が特化する傾向が高まるということの結果なのかもしれない。

今後進められるべき分析は「なぜ男女間に差異が見られるのか」「なぜ U 字型のパターンがみられるのか」、つまりここで示されたパターンを説明する分析に等しい。そうした分析の結果、これらの効果を説明する要因が検出された場合でも、性差とライフステージ・結婚期間によって配偶者からのサポートに一定の差異が示されることは事実である。こうした作業を行なっても、なおかつ性別やライフステージの効果が消失しない場合には他に還元できない性別やライフステージの効果が存在するということになる。これらの分析は基本的にはライフステージなり結婚年数なりを一定段階で区切り、標本を分割して行なわれるべきである。

とくに、サポートが低下する末子年齢 13-18 歳ころに焦点をあてて、サポートの低下を引き起こしている要因を解明することが U 字型のパターンの理解につながるだろう。

文献

Bolger, Niall., DeLongis, Anita., Kessler, Ronald C., and Wethington, Elaine, 1989, The contagion of stress across multiple roles. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 175-183.

Bolger, Niall., DeLongis, Anita., Kessler, Ronald C., and Wethington, Elaine, 1990, The microstructure of daily role-related stress in married couples., In John Eckenrode and Susan Gore (Eds.), *Stress between work and family*, pp95-115, Plenum press.

- Cutrona, Carolyn E., 1996. *Social support in couples*. Sage.
- Glenn, Noval D., 1990. Quantitative research on marital quality in the 1980s: A critical review. *Journal of Marriage and the Family*, 52, 818-831.
- 稲葉昭英, 1992, 家族形成期のストレス. ストレス科学、7、25-29.
- 稲葉昭英, 1998a, ジェンダーとストレス, 季刊家計経済研究, 37, 32-40.
- 稲葉昭英, 1998b, ソーシャル・サポートの理論モデル, 松井 豊・浦 光博編, 人を支える心の科学, 誠信書房, pp151-175.
- 稲葉昭英, 1999, ストレス経験の生涯発達の变化と性差. 理論と方法、14、51-64.
- Kessler, Ronald C. , McLeod, Jane D. and Wethington, Elaine., 1985. The cost of caring: a perspective on the relationship between sex and psychological distress., In Irvin G. Sarason and Barbara R. Sarason (Eds.) *Social support: theory, research and applications*, pp491-506, Martinus Nijhoff.
- Kessler, Ronald C. and McLeod, Jane D., 1984. Sex differences in vulnerability to undesirable life events. *American Sociological Review*, 49, 620-631.
- Pearlin, Leonard I. And McCall, Mary E. , 1990. Occupational stress and marital support. In John Eckenrode and Susan Gore (Eds.), *Stress between work and family*, Plenum press, pp39-60.
- Riley, Dave and Eckenrode, John 1986. Social ties: costs and benefits within differing subgroups. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51, 770-778,
- Rook, Karen. , Dooley, David. , and Catalano, Ralph 1991. Stress transmission: the effects of Husbands' job stressor on the emotional health of their wives. *Journal of Marriage and the Family*, 53, 165-177,
- Weiss, Robert S. , 1990. Bringing work stress home. In John Eckenrode and Susan Gore (eds.), *Stress between work and family*, Plenum press, pp17-37
- Wheaton, Blair 1990. Life transitions, role histories and mental health. *American Sociological Review*, 55, 209-223.,
- White, Lynn K. and Booth, Alan., 1985. Transition to parenthood and marital quality. *Journal of Family Issues*, 6, 435-450.
- White, Lynn K. , Booth, Alan and Edwards, J. N., 1986. Children and marital happiness: Why the negative correlation? *Journal of Family Issues*, 7, 131-147.

文部省科学研究費基盤研究 (A) : 10301010

家族生活についての全国調査 (NFR98) 報告書 No. 2-3

現代日本の夫婦関係

Marital Relations in Contemporary Japan

岩井紀子編

2001年6月

日本家族社会学会
全国家族調査 (NFR) 研究会